

# 日本語学習者のための古典日本語教育再考

－学習者・日本語教師・国語教師の視点から－

春 口 淳 一

针对日语学习者的古典日语教育再思考  
－ 从学习者・日语教师・国语教师的视角来分析－

HARUGUCHI Junichi

## Abstract

在中国，有为数不少的大学对日语学习者进行古典日语教育。但是，无论是学习者还是日语教师，对于应该学什么，学到哪种程度，如何学，还有为什么要学习古典日语的认识极其模糊。本研究参考了国语教育中古典日语教育的经验，从「作为专业日语教育的古典日语教育」和「作为知识素养的古典日语教育」二个角度来提出对古典日语教育再认知的观点。

## 1. はじめに －研究の背景と先行研究－

日本語学習者への古典文法や古典文学の講読といった古典日本語教育は、中国の高等日本語教育プログラムにおいて珍しいものではない。李（2009）は42の大学を調査し、その7割を超える30校で開講されていると報告している。もちろん、この調査結果がそのまま中国の全大学における傾向を表すことにはならない。しかし、復旦大学（湯 1989）、北京第二外国语学院（鈴木 1991）、華僑大学（関・岡崎 2003）の日本語カリキュラムに関する報告書などにも見られることから、古典日本語教育は無視できる存在ではないだろう。

さらに長崎外国語大学では、短期留学生に対して、2008年度より選択科目として古典日本語文法の講座を開講している。これまでに受講した学生は計130名を超え、出身国・地域もアメリカ、韓国、中国、台湾と多岐に渡る。

しかし、非母語話者への古典日本語教育を扱った先行研究には、前述の李（2009）のほか、立松（2000）や金山（2004）といった実践報告に限られるのが現状である。そこで春口（2006）ではアンケート調査を基に、学習者のモチベーションを高めるための試みを取りまとめ、文法項目の定着に擬古文（教師の自作例文）が有効であることを提唱した。また春口（2007）では、古典日本語を現代語訳する際にみられるミステイクを分類・分析し、現代日本語の能力が古典日本語の学習に密接に関わっていることを指摘した。さらに春口（2008a）は学習者が持つ古典日本語教育観と彼らに要求される知識とを分析し、両者のギャップを明らかにした。一方、古典日本語文法のテキストを対象とする研究も、春口（2008b）、春口（2009a）、春口（2009b）、春口（2010）と継続して行っている<sup>(1)</sup>。いずれも、日本語非母語話者を対象にしていながら、それへの配慮が見られなかった点で共通している。

## 2. 研究目的・研究概要

上述の背景や先行研究での取り組みを活用し、ここでは中国における日本語教育、あるいは中国からの留学生に対する日本語教育を想定して研究課題を設定したい。すでに述べたように、少なくとも中国の日本語教育では、古典日本語教育は特異なものとは言えないからである。

そもそも大学・日本語専修プログラムにおいて、なぜ古典日本語教育が施されるのだろうか。何をどこまで、どのように教えることが期待されているのだろうか。授業を担当する教師、受講する学生が直面するこの問いに、中国の日本語教育において「教育現場の教育行為を規定する教育指針（修2004）」となる『教学大綱』は答えてはくれない。『教学大綱』では古典日本語教育を教科の1つとして挙げるのみで、到達目標も学習項目も、なんら具体的に示してはいないのである。

そこで、本研究では教師が持つ古典日本語教育観を探り、高等教育機関で日本語を専攻する学生のための古典日本語教育クラスをどう考えるべきか、その一助としたい。まず春口（2008a）で行ったアンケート調査のデータを活用し、学習者の古典日本語観を探る。次に、教師が持つ古典日本語観がどのようなものか、そのビリーフスを調査する。中国人日本語教師4名へインタビュー調査を実施するとともに、テキストの前言・序言も手掛かりとする。

また古典日本語を日本語学習者に教育するにあたってのヒントを、国語教育に求めることはできないだろうか。中国における古典日本語文法テキストは、その多くが参考文献に日本の高等学校のテキストを挙げている。高等学校の学習指導要領を分析することで、国語教育における古典日本語の位置づけを確認し、日本語教育への応用の可能性を探る。また国語教育での実践例から、国語教師が持つ古典日本語観の一端をもつかみたい。

最後に、それぞれの研究成果を比較し、多角的に古典日本語教育を取り巻く現状について考察したい。これにより、大学・日本語専修プログラムにおける古典日本語教育の課題と対策を明らかにすることが本研究の目的である。

## 3. 学習者の古典日本語観

学習者は古典日本語をどう捉えているのだろうか。中国のある大学の「古典日本語文法」クラス受講生（日本語専攻の3年生）37名を対象に行ったアンケート調査の結果を分析する。受講クラスが古典日本語文法の教授を目的としたクラスのため、質問項目は古典日本語文法に特化したものとなっている（表1）。

表1：アンケートの質問項目

質問①	古典日本語文法を勉強したことがあるか
質問②	なぜ古典日本語文法の授業があると思うか
質問③	古典日本語文法を勉強することが役に立つと思うか
質問④	質問③の回答理由
質問⑤	望む古典日本語文法の知識の程度
質問⑥	授業参加に対する意欲
質問⑦	質問⑥の回答理由

アンケート調査は記名式とし、授業第1回の冒頭を実施した。質問①、②、④、⑦は記述式による回答を求めた。一方、質問③、⑤、⑥は5段階評価による回答形式をとっており、それぞれ、「とても役に立つ」を5、「全く役に立たない」を1に（質問③）、「高度な専門知識」を5、「初歩的な知識」を1に（質問⑤）、「とてもある」を5、「ない」を1とする（質問⑥）。調査結果の詳細は、前者を資料1に、後者を資料2にそれぞれまとめ、本稿末尾に提示している。

アンケートは対象とした37名全員から回収することができた。調査結果より、学習者が持つ古典日本語観として明らかになった事柄は次の通りである。

まず、記名式のアンケートであったにもかかわらず、授業参加への意欲が「とてもある」と答えた学生は半数に満たない。次に、同様に「とても役立つ」と答えた学生も15名に留まった。また、学習者の半数は古典文学の読解などを古典日本語文法の学習目的に挙げるものの、その必然性に懐疑的な学生も多い。その理由として「生活・仕事で生かせない」など実用的ではないとの考えが多く挙げられる。その上、古典日本語文法に興味を持てず、仕方なく授業に参加する学生もいる。そして、既習知識を持って受講する学習者はおらず、ごく基礎的な知識を求める学習者が多い。

学習者の多くは古典日本語文法の学習に対して、明確な学習動機を持っていないことがこの結果から汲み取れる。学習を課すのであれば、学習者に対して古典日本語文法を学ぶことでどんなメリットがあるのか、明示することが求められるのではないだろうか。

## 4. 日本語教師の古典日本語観

### 4.1 インタビュー調査

「古典日本語文法」クラスを開講している中国の大学に勤務する中国人日本語教師4名へインタビューを実施した（学習者へのアンケートを実施した大学に同じ）。2名が20代の女性、2名が30代の男性教員である。いずれも大学、大学院で古典日本語教育を受けた経験を持ち、また古典日本語教育に従事した経験を持たない点も共通している。

インタビューでは、「大学で日本語を専門に学ぶ学生にとって、古典日本語は教育すべきか」、「古典日本語を教育する際、その学習時期はいつごろが適当か」、「目指すべき到達目標は何か」、「学習項目として何を取り上げるべきか」、「どのように教育するのが適当か」、「学生に提示できる学習のメリットにはどのようなものがあるか」について尋ねた。

質問への4名の回答は、一致したものとなった。これはインタビューに応じてくれた教師が、いずれも古典日本語教育に関するビリーフを具体的に持っていなかったからこそであろう。

日本語教師の古典日本語教育は、以下の5つにまとめることができる。

- ・ 古典日本語は教育すべきである。
- ・ その時期としては上級学年、例えば3年後期や4年前期が適当である。
- ・ 指導法については、体系的に知識を教授するのが良い。その際、例文をたくさん紹介することが望ましい。
- ・ 学習のメリットも挙げているが、それは「日本語の表現が豊かになる」などといった抽象的なものであった。
- ・ 到達目標や学習項目に関して、具体的に言及することはなかった。

#### 4.2 テキストの前言・序言

先行研究で取り上げたテキストは、その前言や序言でいずれも入門書として自ら位置づけている旨を述べている。しかし古典日本語を学習する必要性、メリットについて触れているのは『日本古典文法』だけであった。この『日本古典文法』の監修に当たった横山邦治氏の序言を以下に引用する。

(前略)

日本語の習得のためには、日本語の歴史を知ることによって、より一層日本語の実像に近付き得ることがあるのは自明のことである。そうすることによって、日本の文化も初めて十全に理解し得るのであり、中国の日本語習得者に時に感じられる一知半解という臭いが、こういう学習を通じて消えていくはずなのである。中国の日本語教育における古典語・古典文学学習の必要性が、ここにあるのである。一つ功利的に言えば、日本に留学したいと希望している日本語学習者は非常に多いのであるが、そういう人たちが日本語・日本文学研究を志す大学院の講座に入ろうとする時の障害になっているのだが、現実的に古典語・古典文学に関する知識の欠除にあるということもあるので、その障害を除去するためにも、古典語・古典文学の学習は必須の条件なのである。

(後略)

横山氏は、古典日本語の学習を日本語と日本文化の理解・習得のために必要であると考えている。また学習動機の向上につながる学習のメリットの一例として、日本語・日本文学専攻とする大学院を受験する際に古典日本語(横山氏の言では「古典語・古典文学」)の学習が欠かせないことを挙げている。

試験に課されるということは、それらの知識が大学院で日本語・日本文学専攻する者には求められるということではないだろうか。そうであれば「功利的」などと、貶める必要はないだろう。

また古典日本語の知識が要求されるのは、日本語・日本文学専攻に限った事であろうか。法律であれ、経済であれ、日本におけるそれを研究の対象としたとき、目を通さなければならない文献に古典日本語が未使用であるとは限らないだろう。実際、筆者は日本史を大学院で専攻する留学生から、「古典日本語がわからないため、資料を読むことができない」といった相談を受けたこともある。理系はともかく文系の大学院進学者にとっては、研究のフィールドを日本に求めた時、古典日本語の存在は無視できないのではないだろうか。

#### 5. 国語教師の古典日本語観

多くの古典日本語文法のテキストが、日本の高校生向けの教材を参考に編まれている。例えば春口(2009b)の分析対象となった『日語古典語法』には高校生を対象とした学習参考書である『古文文法入門』<sup>(2)</sup>、『古文文法の急所』<sup>(3)</sup>、『古典文法の総まとめ』<sup>(4)</sup>などを参考文献として挙げている。中国における古典日本語教育にはその指針を規定したものがないが、それではテキストが参考としている日本の国語教育はどうだろうか。そこで文部科学省ホームページ「高等学校学習指導要領」<sup>(5)</sup>(以下、『学習指導要領』)を参照し、国語教育における古典日本語文法がどのように取り扱われているか探る。

また国語教師が古典を教えるにあたって留意する事柄にはどのようなものがあるだろうか。その取り組みについて言及された文献を紹介し、参考に供したい。

### 5.1 『学習指導要領』より

『学習指導要領』は、平成21年3月に改訂版が公示されている。旧『学習指導要領』から古典教育の取り扱いについて改められた箇所、すなわち新『学習指導要領』における「古典教育に関して特筆すべき」点として、菊川（2009）は次のように指摘している。

現行の「話す・聞く、書く、読む」の3領域と〔言語事項〕の構成を改め、3領域に加え〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕<sup>(6)</sup>を置いたことである。

（中略）

このような伝統的なものへの志向は、平成十八年に改正された「教育基本法」（第2条5号）に示された、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」を受けたものであり、もう一方では「グローバル化する国際社会における日本人アイデンティティ」の問題が影響していると言えよう。

国語教育においては、古典教育がこれまで以上に重視される傾向がみられるというのである。そして、その目的には「国際社会における日本の独自性」を母語話者である学習者に意識させようとしていることが窺える。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に加え、関連する「古典A」「古典B」に関する記述を資料として文末に掲載したが、これらから教育目的が読み取れる。すなわち、国語教育においては古典を学ぶことで、

- ・ 古典に親しみ、楽しんでもらいたい。
- ・ 人間、社会、自然などについて考察してもらいたい。
- ・ 日本の伝統文化を理解してもらいたい。
- ・ 日本文化と中国文化の関係に着目してもらいたい。

というのである。古典を学ぶことで技術的に何かができるようになるというのではなく、教養として位置付けられるような事柄を目的としているのである。菊川（前掲）が指摘するように「日本人のアイデンティティ」を育てることもさることながら、しかし中国の文化について目を向けさせようとしていることは、中国の日本語教育における古典の取り扱いを考える上で見逃せないだろう。このことは「古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができる」<sup>(7)</sup>、「古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする」<sup>(8)</sup>といった内容の扱いに関する記述からも見て取れる。

また『学習指導要領』が示す授業活動の有り様についてだが、その特色には

- ・ 音読、朗読、暗誦をする
- ・ 日常生活の中での関連表現を集め、調査し、報告する
- ・ 古典を読み、感じたこと・考えたことを文章にまとめたり話し合ったりする

ことが記載されている。音読などは古典に親しむことを意識した活動であろう。また生活の中の関連表現というのも親しみを持たせることと現代日本語との相違を意識させる効果があるだろう。最後に挙げられたディスカッションなどでは、古典はあくまで素材であって、文法の暗記に偏ることの無いよう配慮されていることが分かる。



## 5.2 国語教育における古典教育の実践例より

高等学校における古典教育の学習指導について、五十嵐(2010)が自身の取り組みを紹介している。以下の4項目となる。

- ・ 古典学習導入として、現在小学校や中学校の音楽科で取り上げられてもいる文語調の歌唱教材(童謡や文部省唱歌等)を用いることで、日常生活に生きる文語体について興味・関心を喚起させた。
- ・ 古今異義語を提示し、現代語には名詞しか残らない特殊な動詞9例を提示した。
- ・ 文法指導においては、高校入学時の学習意欲も旺盛で、(中略)知識欲も高い時期に、動詞の活用をはじめとして用言の活用や頻出する助動詞の用法などをしっかり教えることをためらってはいけない。
- ・ 反復繰り返し学習の教材として『古今和歌集』の和歌を多用していた。

童謡や和歌といったものは、日本語を母語とする学習者が親しみの感じることの期待できる教材でもあることから、国語教育においてこれらを活用することは新『学習指導要領』の記載内容とも合致する。特に童謡・唱歌は、新『学習指導要領』において授業活動として提唱される「音読、朗読、暗誦」に適したものだと考えられる。本項で取り上げた実践例は一例に過ぎないものの、『学習指導要領』に沿う取り組みが実際に行われていることは、『学習指導要領』が現場から乖離したものではないことの証左となるだろう。

国立大学の教育学部で学ぶ学生に古典を教える菊川氏は、授業中の気づきとして次のコメントを挙げている(菊川 2009)。

また、学生が異口同音に語るのは、古典の授業が面白くなかったことだ。文法と現代語訳中心の授業は英語の授業と同じだが、英語のように役には立ちそうもないという。

五十嵐氏の取り組みにも、用言・助動詞といった文法教育はもちろん含まれる。授業活動の一つとして、現代語訳を課すこともあるだろう。しかし、それだけに終始するのではなく、古典日本語がどれだけ身近なものか、またどれだけ現代の日本語と異なる特色を持っているのかを高校生に知ってもらうことを主眼としている。

ただしここに挙げられた授業活動がそのまま日本語学習者への教育にあてはめる事は難しい。日本語を母語とする学習者であれば、童謡・唱歌は親しみのある教材として期待できるが、日本語非母語話者に対してはどうであろうか。また和歌であるが、掛詞や枕詞など複雑な表現形式を含み、文化的な背景についての理解も求められるため、日本語学習者にとっては負担が大きいと思われる。

## 6. 考察

これまで日本語学習者、日本語教師、国語教師が古典日本語をどのようにみているのか個別に考えてきた。そこで、本章ではそれぞれの調査結果、さらには先行研究の成果も踏まえて考察を深めていきたい。

中国の日本語専修のプログラムにおいては、教員も学生も古典日本語教育の必要性を概ね認めている。しかしながら、何のために学ぶのか、学ぶことでどんなメリットがあるのか語られることはほとんどなかった。「日本語専修の学生には古典日本語教育が必要だ」と学修を強要するだけでは、明確な目的意識を持つことはできず、学習者のモチベーションが向上することはないだろう。かえって、より必然性が高いと学習者が考える現代の日本語を学ぶ時間をいたずらに割くことになりかねない。

国語教育においては古典日本語教育を通して、日本の伝統文化から中国と日本の文化的な関係まで、幅広い学習効果を求めている。国語教育では読む能力を養うことは目標の一つであり、この点は日本語学習者や日本語教師とも共通する見解である。しかし、それ以上に古典に親しむことを重視している。これは、いわば教養としての古典日本語教育と捉えることができるだろう。

一方で、「日本語・日本文学専攻とする大学院試験に必要だ」という横山氏の提言は具体的なものではあった。中国の大学においても大学院の入学試験に課されることもあるし、教育部が主催する「日語專業八級考試」でも出題される（春口 2008a）。しかし、テスト対策を目的としたのでは日本語教師と日本語学習者が求める読解力を育てることができるだろうか。国語教育においても大学入試のための古典日本語学習に終始した結果、センター試験の古典日本語問題で7～8割取るような学生であっても、選択肢ではなく記述式での回答を求めると、「本文から逸脱した突拍子もない」ものが散見されるなど「学生の古典読解力の低下」が指摘されている（菊川 2009）。

## 7. まとめ ―日本語学習者を対象とする古典日本語教育への提言

古典日本語文法は、大学・日本語専修プログラムにおいて、消極的に位置づけられている。教師も学習者も、古典日本語文法を漠然とした印象で捉え、受容していることが調査の結果から窺える。しかし、なぜ教えるのか、誰に教えるのか、何を教えるのか、どこまで教えるのかを吟味することなく授業をデザインすることはできない。古典日本語文法を教育プログラムの一つとして今後も設置し続けるのであれば、学習のメリットの提示と理解、学習項目の選定、教授法の確立など、取り組むべき課題は多い。

なかでも学習のメリットはプログラムの根幹であるが、学習者と教師の認識を取り上げ、そこに見られる問題は前章で指摘した通りである。学習者は、自身ではなかなか学習によって得られるものに思い至ることが難しい。そこで、授業担当者が学習者に対して教育の目的とそれによって得られる報酬を明示し、コースデザインを組み立てることが求められるだろう。学習のメリットに立脚し、本稿のまとめとして「専門日本語教育としての古典日本語教育」と「教養科目としての古典日本語教育」の二つのプログラムを提言したい。

### 1) 専門日本語教育としての古典日本語教育

専門日本語教育の一つとして古典日本語教育を位置づけ、教育プログラムを確立することがあっていいのではないか。一橋大学は近代日本研究を志す留学生のために特化した古典日本語文法テキスト<sup>(9)</sup>を制作しているが、これはその嚆矢として捉えることができるだろう。

日本語能力試験にも、文語表現はある程度含まれてきた。しかしもう一步踏み込んで、日本をフィールドとする研究を選んだ大学院生・研究生をサポートするような古典日本語教育が必要であろう。

## 2) 教養科目としての古典日本語教育

本稿では中国における日本語教育、あるいは中国からの留学生への日本語教育を想定して、古典日本語の有り様を考えてきた。国語教育では、古典日本語教育を通して中国の文化理解をも目指すというが、それならば、中国の学生が古典日本語教育を学ぶことは、日本文化と中国文化の双方に興味・関心を抱き、理解する機会とすることもできるのではないだろうか。

ここで注意したいのは、先行研究で分析の対象とした4冊の教科書、すなわち『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』、『日語古典語法』、『日本古典文法』には例文の出典を漢文に求めたものがなかったことである。中国語を母語とする日本語学習者にとって、より親しみやすいものであるにも関わらず、これが取り上げられてはいない点は留意すべきだろう。

「専門日本語教育としての古典日本語教育」と「教養科目としての古典日本語教育」は、それぞれ学習の目的、期待される効果が異なるため、当然学習項目や目指すべき到達目標、教材も独自のものとなるだろう。ともあれ、科目名のみで放任されている日本語教育における古典日本語の取り扱いはい改めるべきである。消極的に位置づけられてきた古典日本語であるが、学ぶことでメリットを享受する学習者がいるのであれば、それにむけて積極的にプログラムの内容を整理・確立することがあっていいだろう。

※ 本稿は、2010年7月31日、8月1日に台湾・政治大学で開催された世界日語教育大会での研究発表を基に加筆・修正したものである。

### 注

- (1) 春口(2008b)が王雪松編(2005)『日本語古典文法』武漢大学出版社を、春口(2009a)が梁海燕編(2006)『簡明日本語古文教程』華東理工大学出版社を、春口(2009b)が鉄軍編(2006)『日語古典語法』北京大学出版社を、春口(2010)が崔香蘭編(2006)『日本古典文法』大連理工大学出版社をそれぞれ対象として分析を行った。
- (2) 書名は、正しくは『中里の即決古文文法入門—代々木ゼミ方式』(中里公俊(1992)代々木ライブラリー)である。
- (3) 書名は、正しくは『一問一答式 古典文法入門』(黒澤弘光(1997)富士教育出版社)である。
- (4) 書名は、正しくは『古典文法の総まとめ—古文学習にぜったい必要な文法必携(実戦トレーニング)』(山本康弘(1994)中央図書)である。
- (5) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf)
- (6) [伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]として新指導要領に記載されている内容は次の通りである。
  - (1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。
    - ア 伝統的な言語文化に関する事項
      - (7) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文



化への興味・関心を広げること。

- (イ) 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

- (ア) 国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること。

- (イ) 文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。

ウ 漢字に関する事項

- (ア) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようになること。

- (7) 『高等学校学習指導要領』「国語 第5 古典A 3内容の取扱い」より抜粋

- (8) 『高等学校学習指導要領』「国語 第6 古典B 3内容の取扱い」より抜粋

- (9) 松岡弘編著 (2001) 『一橋大学学術日本語シリーズ7 留学生のための日本語教科書 学術日本語の基礎 (二) 近代文語文を読む』一橋大学留学生センター

参考文献

五十嵐一郎 (2010) 「生涯にわたり古典に親しみを抱き続ける学習指導」『日本語学』vol.29-3、明治書院、50-58 頁

金山泰子 (2004) 「上級学習者のための文語文法入門」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』27、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、41-62 頁

間英・岡崎智己 (2003) 「華僑大学における日本語教育 - 中国における学部生日本語教育課程を考える -」『九州大学留学生センター紀要』13、九州大学留学生センター、1-10 頁

菊川恵三 (2009) 「新学習指導要領の〔伝統的な言語文化〕と古典教育」『日本語学』vol.28-3、明治書院

修剛 (2004) 「大学専門日本語教育の指導要綱とその役割 - 中国の場合 -」『2004 年日本語教育国際研究大会予稿集 発表2』日本語教育学会、36-40 頁

鈴木宣行 (1991) 「北京第二外国語学院における実践的外国語教育 - 日本語学科の学習指導を通して -」『創価大学別科紀要』5、創価大学、23-51 頁

立松喜久子 (2000) 「文語文法を考える 外国人上級学習者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、1-24 頁

湯麗敏 (1989) 「中国復旦大学国際政治学部における日本語の教育」『創価大学別科紀要』4、創価大学、72-77 頁

春口淳一 (2006) 「非母語話者を対象とした古典文法授業の実践報告 - 学習者のモチベーション向上を目指した取り組み -」『中国日語教育理論と実践研究』吉林大学出版、56 - 66 頁

春口淳一 (2007) 「非母語話者が古典日本語文法を学習する際の問題点 - 現代日本語訳におけるミステイク分析から -」『長崎外大論叢』11、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、109 - 122 頁

春口淳一 (2008a) 「日本語学習者と古典日本語文法 - 学習者が求めるもの・学習者に求められるもの -」2008 年度日本語教育学会第2 回研究集会発表資料

春口淳一 (2008b) 「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 - 武漢大学出版社『日本語古典文法』を例として -」『長崎外大論叢』12、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、71 - 84 頁

春口淳一 (2009a) 「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 (2) - 華東理工大学出版社『簡明日本語古文教程』を例として -」 2009 年度日本語教育学会第 1 回研究集会発表資料

春口淳一 (2009b) 「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 (3) - 北京大学出版社『日語古典語法』を例として -」『長崎外大論叢』13、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、131 - 144 頁

春口淳一 (2010a) 「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 (4) - 大連理工大学出版社『日本古典文法』を例として -」 2010 年度日本語教育学会第 2 回研究集会発表資料

春口淳一 (2010b) 「日本語学習者のための古典日本語文法 - 教師が持つ古典日本語文法観 -」 2010 世界日本語教育大会発表資料

李宇玲 (2009) 「中国の大学における日本古典教育について - 八級試験の出題傾向と関連して -」 第五回中国大学日本語教育国際シンポジウム発表資料

資料 1 : アンケート結果 (質問③、⑤、⑥)

質問		回答 (5 段階)					(平均)
		5	4	3	2	1	
③	回答数	15	7	14	0	1	3. 95
⑤		3	14	14	3	2	3. 27
⑥		17	11	8	0	1	4. 16

資料 2 : アンケート結果 (②、④、⑦)

質問	回 答 (回答数)	
②	伝統文化を勉強するため (13) 日本語を専門に学ぶものには不可欠だから (7) 日本語教師になるには欠かせないから (1)	
④	肯定的	古典文学を読むには欠かせないから (10) 現代日本語にも古典文法が含まれているから (3) 大学院の入学試験で出題されるから (2) 単位を取ることができる (1) 日本社会を理解するのに役立つ (1)
	否定的	生活では役に立たないから (4) 役に立つかどうか、まだわからない
⑦	積極的	より多くの知識、新しい知識を身につけたいから (7) 担当教師が好きだから、担当教師が日本人だから (3) 現代日本語より特別の役割があるから (1)
	消極的	古典文法は役に立たないから (4) 必修授業だから (2) よい成績を取りたいから (1) 教師が真面目に準備するから (1)

## 資料3：『高等学校学習指導要領 国語 古典A』

## 第5 古典A

## 1 目標

古典としての古文と漢文，古典に関連する文章を読むことによって，我が国の伝統と文化に対する理解を深め，生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

## 2 内容

## (1) 次の事項について指導する。

- ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り，人間，社会，自然などについて考察すること。
- イ 古典特有の表現を味わったり，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。
- ウ 古典などを読んで，言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。
- エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し，様々な資料を読んで探究して，我が国の伝統と文化について理解を深めること。

## (2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

- ア 古文や漢文の調子などを味わいながら音読，朗読，暗唱をすること。
- イ 日常の言語生活の中から我が国の伝統と文化に関連する表現を集め，その意味や特色，由来などについて調べたことを報告すること。
- ウ 図書館を利用して古典などを読み比べ，そこに描かれた人物，情景，心情などについて，感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。

## 3 内容の取扱い

## (1) 古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができる。

## (2) 古典を読む楽しさを味わったり，伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを重視し，古典などへの関心を高めるようにする。

## (3) 教材については，次の事項に留意するものとする。

- ア 教材は，特定の文章や作品，文種や形態などについて，まとまりのあるものを中心として適切に取り上げること。
- イ 教材には，古典に関連する近代以降の文章を含めること。また，必要に応じて日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること。
- ウ 教材は，次のような観点に配慮して取り上げること。
  - (7) 古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。
  - (i) 人間，社会，自然などに対する様々な時代の人々のものの見方，感じ方，考え方について理解を深めるのに役立つこと。
  - (ii) 様々な時代の人々の生き方や自分の生き方について考えたり，我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。
  - (i) 古典を読むのに必要な知識を身に付けるのに役立つこと。
  - (ii) 現代の国語について考えたり，言語感覚を豊かにしたりするのに役立つこと。
  - (iii) 中国など外国の文化との関係について理解を深めるのに役立つこと。

資料4：『高等学校学習指導要領 国語 古典B』

第6 古典B

1 目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

2 内容

(1) 次の事項について指導する。

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較し、その変遷などについて分かったことを報告すること。

イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。

ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして話し合うこと。

エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりすること。

3 内容の取扱い

(1) 古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする。

(2) 古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れるようにする。

(3) 文語文法の指導は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。

(4) 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。

イ 教材には、日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。